鶴是也、鶴別名也、

〔箋注倭名類聚抄七鳥名〕按、都流以其聲得名、○中略 說文、鶴鳴九皐、聲聞于天、陸佃曰、鶴形狀如鵝、青脚素翼、常夜半鳴、其鳴高亮、聞八九里、雌者聲差下、羅願曰、脚青黑高三尺餘、喙長四寸、○中略 按萬葉集鵠字鶴字訓多豆、多豆見古事記、葦鶴見萬葉集、其他所見猶多、多豆田鶴之省、田鶴以其所在之處得名、猶濱千鳥之稱、葦多豆、顯昭曰、鶴或在蘆葦之中、故有是名、猶蘆鴨之得葦名也

〔段注說文解字四上鳥〕鶴、鶴鳴九皐、聲聞于天、鶴字今補、此見詩小雅、毛曰、皐、澤也、言身隱而名著也、爾雅無鶴、故偁詩後人鶴與鵠相亂、从鳥隺聲、下各切、古音在二部

〔類聚名義抄九鳥〕鶴河各反、ツル、　鶴上俗下正　鶴鴿俗正、音零、タヅ、鶴別名、　鳶同　鵄ツル

〔干祿字書入聲〕鶴鶴上俗下正

〔下學集上氣形〕鶴ツル呼名仙客、又名丹歌、見類說、

〔運步色葉集多〕多頭ツ鶴名　〔同鳥名〕眞鶴マナツル

〔和爾雅六禽鳥〕鶴ツル鶬同、或名仙客、仙禽、玄鶴クロツル灰鶴同　白鶴シロツル　鶬鷄マナツル鶬鴰同、亦但稱鶬、又名麋鴰、鴰鹿、

〔八雲御抄三下鳥〕鶴　たづ　まなづる一說白鶴也　ひなづる　しら鶴　しらたづとも　あしたづ　霜のつる　くろづる　万十一、たづのとゞろといふ、是なくこゑをよそにきく心也、たづがねとも云　霜さむくてなくと云、古歌にもおほし、又本文なり、　古歌、あしのはにおくしら露やさむからんさはべのたづのこゑのきこゆる、　かける　とぶ

〔日本釋名中鳥〕鶴ツル　つるはつらなる也、おほくつらなりとぶ鳥也、雁もつらなりとべども、次第にさがる、つるはすぐにつらなる也、或曰すぐる也、すとつと通ず、中を略す、諸鳥にすぐれて大なる鳥也、

〔東雅十七禽鳥〕鶴ツル○中略　ツルといひ、タヅといふ、義並に不詳、萬葉集歌に、鶴群よみてツルムラと云ひけり、ツルといひ、ツラといふは